

山階芳麿賞について

山階鳥類研究所は、平成4(1992)年7月に行われた財団創立50周年記念行事の一環としてこの賞を設けることにした。この賞は日本の鳥学及び保護に寄与された、財団法人山階鳥類研究所の創立者・故山階芳麿博士の功績を記念して、「山階芳麿賞」と名付けた。

山階芳麿賞は、国内において鳥学及び鳥類保護に顕著な功績のあったものを讃え、わが国の鳥学の発展並びに鳥類保護の振興に寄与することを目的としている。

受賞者は「山階芳麿賞」選考委員会で選考される。受賞者は、隔年度1名とし、選考の結果該当者がいない場合には、その年度の表彰は行わない。選考委員会は山階鳥類研究所所長が委員長を務め、山階鳥類研究所副所長、鳥学研究室長、理事及び評議員(5名以内)、学識経験者(5名以内)、その他理事長が必要性を認め適格と判断する者(若干名)で構成される。受賞者の選考は、出席選考委員の過半数をもって決定する。

受賞者には、山階鳥類研究所総裁・秋篠宮文仁親王が表彰する予定で、表彰状と山階芳麿賞記念メダルを贈呈する。記念メダルのデザインは、表・山階芳麿博士肖像、裏・ヤンバルクイナのレリーフとなっており、受賞年と受賞者氏名が刻印される。ヤンバルクイナは沖縄県で発見され、昭和56(1981)年に山階芳麿博士らが新種として発表した山階鳥類研究所のシンボルの一つ。なお、平成15(2003)年度からはさらに副賞として「朝日新聞社賞」(賞金50万円と盾)が贈られている。

歴代受賞者については別紙を参照のこと。

山階芳麿博士の業績

山階芳麿博士 (1900～1989) は、幼い頃から鳥に興味を持っていたが、昭和 4 (1929) 年に動物学の基礎を学ぶため帝国大学 (現東京大学) 理学部動物学科選科に入学、同 6 (1931) 年に修了後、昭和 7 (1932) 年に山階鳥類研究所の前身である山階家鳥類標本館を設立した。その後、鳥類の研究に没頭し、積極的にアジア・太平洋地域の鳥類標本を収集し、分類研究を行った。昭和 14 (1939) 年から、北海道帝国大学 (現北海道大学) の小熊捍教授の指導を受けて鳥類の雑種不妊性の研究を行い、昭和 17 (1942) 年「鳥類雑種の不妊性に関する研究」で同大学から理学博士号を受けた。その後、引き続いて鳥類の染色体型の研究に取り組み、鳥類分類に染色体を利用する方法を導入、この成果を昭和 24 (1949) 年に「細胞学に基づく動物の分類」として出版した。この業績は、主観的な形態分類に代わる客観的な分類法として国の内外から高く評価され、これにより翌年、日本遺伝学会賞を受賞した。また戦後、国内の蛋白質不足が著しくなったことから、文部省から「ニワトリの増殖」について研究委託を受け、多産で肉質がよいニワトリの品種改良にも取り組み、このほかバリケンとアヒルの雑種ドバンの増殖研究にも力を入れた。その後、研究だけでなく、鳥類保護とその普及啓蒙にも熱意を注いだ。日本鳥学会会頭、日本鳥類保護連盟会長、国際鳥類保護会議副会長、同アジア部会長などの役職を歴任した。

同博士の主な著書には、「日本の鳥類と其生態」(第 1 巻 : 1933、第 2 巻 : 1941) があり、また「世界鳥類和名辞典」(1986) がある。「世界鳥類和名辞典」は世界の鳥類全種に和名を付けたもの。

昭和 52 (1977) 年に、鳥学の世界のノーベル賞とも言われる、ジャン・デラクール賞を受賞。翌 53 (1978) 年には「世界の生物保護に功績があった」としてオランダ王室から第 1 級ゴールデンアーク勲章を受けた。

山階芳廬賞 歴代受賞者

回数	氏名	所属・職名	受賞年月日	備考
第一回 (贈賞理由)	羽田健三	信州大学名誉教授 独創的な雁鴨(ガンカモ)科鳥類の群集生態学研究 鳥類生態学を志す後進の育成	平成 4 年 7 月 3 日	H 6 年 11 月逝去
第二回 (贈賞理由)	松山資郎	山階鳥類研究所顧問 元農林省主任研究官、元山階鳥類研究所事務局長・資料室長 応用鳥学・野生鳥類の保護管理に関する基礎的研究 野生鳥類保護管理に関する後進の指導	平成 5 年 7 月 5 日	H12 年 8 月逝去
第三回 (贈賞理由)	中村 司	山梨大学名誉教授 鳥類の渡りに関する生理学的研究 地元における鳥類保護・自然保護の推進	平成 6 年 7 月 5 日	
第四回 (贈賞理由)	黒田長久	山階鳥類研究所所長 鳥類の形態・生態に関する幅広い分野の研究 現代鳥学界における礎石的存在	平成 7 年 7 月 5 日	現・山階鳥類研究所名誉所長
第五回 (贈賞理由)	中村登流	上越教育大学名誉教授 鳥類社会学に関する長年の研究 鳥類社会学を志す後進の指導	平成 8 年 7 月 3 日	
第六回 (贈賞理由)	正富宏之	専修大学北海道短期大学教授 我が国の動物行動学の発展に貢献 長年タンチョウの生態研究と保護に尽力	平成 9 年 9 月 9 日	
第七回 (贈賞理由)	樋口広芳	東京大学大学院教授 鳥類生態学に生物進化の多次元性を取り入れた研究 渡り鳥の人工衛星追跡調査手法を確立し鳥類保護に貢献	平成 10 年 7 月 4 日	
第八回 (贈賞理由)	山岸 哲	京都大学大学院教授 鳥類の社会生態学的研究の推進と オオハシモズ科の適応放散の研究と保護に貢献	平成 11 年 7 月 3 日	現・山階鳥類研究所所長

回数	氏名	所属・職名	受賞年月日	備考
第九回 (贈賞理由)	藤巻裕蔵	帯広畜産大学教授 エゾライチョウの野外研究を基にその飼育や保護管理に貢献 日本とロシアの鳥類研究者との交流を推進	平成 12 年 6 月 17 日	
第十回 (贈賞理由)	小城春雄	北海道大学大学院教授 北太平洋における海鳥の生態解明とその研究成果を基にした 海鳥保護の推進および後進の指導に尽力	平成 13 年 6 月 1 日	
第十一回 (贈賞理由)	中村浩志	信州大学教授 カッコウの宿主の共進化特に宿主転換と宿主に対応する托卵系統の存在を明らかにし後進の指導に尽力	平成 14 年 6 月 7 日	
第十二回 (贈賞理由)	石居 進	早稲田大学名誉教授 鳥類の生殖腺刺激ホルモンの解明に取り組み、絶滅危惧種の繁殖促進に貢献した 後進の指導に尽力	平成 15 年 9 月 23 日	
第十三回 (贈賞理由)	由井正敏	岩手県立大学教授 森林性鳥類の個体数推定の推定法を確立、森林と鳥類群集の関係を基礎応用の両 面から追究し、後進の指導に尽力	平成 16 年 9 月 23 日	

第14回山階芳麿賞受賞者の紹介

- 【氏名】 長谷川 博 (ハセガワ ヒロシ)
- 【所属学部・学科】 東邦大学 理学部 生物学科
- 【生年月日】 1948年10月3日 静岡県静岡市生れ
- 【職名】 教授
- 【研究室の連絡先】 電話 047(472)5236
FAX 047(472)5236
電子メール hasegawa@bio.sci.toho-u.ac.jp
- 【学歴】 1971年3月 京都大学農学部農林生物学科 (昆虫学) 卒業
1971年4月 京都大学大学院理学研究科修士課程 動物学専攻 (生態学) 進学
1973年4月 同 博士課程進学
1976年3月 同 単位取得退学
- 【略歴】 1976年4月 日本学術振興会奨励研究員
1977年4月 東邦大学理学部生物学科助手 (海洋生物学)
2004年4月 同 教授 (動物生態学)
- 【主な専門分野】 動物生態学、海洋鳥類学
- 【研究課題】 ・アホウドリの長期個体群監視調査とその保護
・伊豆・小笠原諸島海域における海鳥類の繁殖分布と行動、生態
- 【主な担当科目】 ・基礎生態学、多様性生物学、野外生態学実習



【研究業績】

●論文・雑誌記事 (和文)

- 長谷川博, 1979. アホウドリ-その歴史と現状(I)(II). 海洋と生物, 1(4): 18-22; 1(5): 30-35.
- 長谷川博, 1984. 海鳥の人口論, 森岡弘之・中村登流・樋口広芳(編). 現代の鳥類学. 朝倉書店, 東京. pp. 199-214. (第9章)
- 長谷川博, 1995. アホウドリたちの憂鬱. 世界, 616: 145-152.
- 長谷川博, 1997. アホウドリはよみがえるか. 科学, 67(3): 211-218.
- 長谷川博, 1999. アホウドリは復活するか. 遺伝, 53(4): 86-89; 53(5): 54-58.
- 長谷川博, 2001. 羽毛を狙われた日本の鳥たち-アホウドリ. 野鳥, 66(9): 4-9.
- 長谷川博, 2002. 鳥島噴火のアホウドリへの影響は? 遺伝, 56(6): 27-28.
- 長谷川博, 2004. 復活の風に乗るアホウドリ. エコソフィア, 13: 74-81.
- 長谷川博, 2005. アホウドリ復活の夢を追って. 学士会会報, 852: 94-111.
- 長谷川博, 2006. 小笠原諸島にアホウドリの第3繁殖地を. どうぶつと動物園, 58(1): 4-13.

●論文・雑誌記事 (英文)

- H. Hasegawa, 1977. Status of the Short-tailed Albatross on Torishima in 1976/77. Pacific Seabird Group Bull: 4(2): 13-15.
- H. Hasegawa, 1978. Recent observations of the Short-tailed Albatross *Diomedea albatrus*

- on Torishima. Miscellaneous Report of the Yamashina Institute for Ornithology. 10(1/2): 28-69.
- H. Hasegawa, 1979. Status of the Short-tailed Albatross of Torishima and in the Senkaku Retto in 1978/79. Pacific Seabird Group Bull: 6(1): 23-25.
- H. Hasegawa, 1980. Observations on the status of the Short-tailed Albatross *Diomedea albatrus* on Torishima, Japan in 1977/78 and 1978/79. Journal of the Yamashina Institute for Ornithology, 12(2): 59-67.
- H. Hasegawa, 1982. The Breeding Status of the Short-tailed Albatross *Diomedea albatrus* on Torishima, 1979/80-1980/81. Journal of the Yamashina Institute for Ornithology, 14(1): 16-24.
- H. Hasegawa, 1984. Status and Conservation of Seabirds in Japan, with Special Attention to the Short-tailed Albatross, ICBP Technical Publication, 2: 487-500.
- H. Hasegawa and A. R. DeGange, 1982. The Short-tailed Albatross, *Diomedea albatrus*, its status, distribution and natural history. American Birds, 36(5): 806-814.
- H. Hasegawa, 1991. Red Data Bird: Short-tailed Albatross. World Birdwatch, 13(2): 10.

● 著書・訳書

- 『白鳥の旅：シベリアから日本へ』 東京新聞出版局, 1988.
- 『渡り鳥 地球をゆく』 (岩波ジュニア新書168) 岩波書店, 1990.
- 『アホウドリと大あほうどり先生』 (学研のノンフィクション) 学習研究社, 1990.
- 『はじめての野鳥』 (写真: 叶内拓哉・溝口清秀) 岩波書店, 1993.
- 『風にのれ! アホウドリ』 フレーベル館, 1995.
- 『アホウドリ 愛のシンフォニー』 (長谷川博写真集) 講談社, 1995.
- 『アホウドリの島』 フレーベル館, 1997.
- 『50羽から5000羽へ: アホウドリの完全復活をめざして』 どうぶつ社, 2003.
- 『鳥の生命の不思議』 アドルフ・ポルトマン (著) 長谷川 博 (監訳) どうぶつ社, 2003. など

【研究業績の保全活動への応用】

1976年から主繁殖地である伊豆諸島鳥島で、絶滅のおそれのある大形の海鳥アホウドリの長期個体群監視と保護の研究に取り組み、この種の保護を大きく前進させた。研究にもとづいて提案された保護構想や基本計画は、環境省や東京都、山階鳥類研究所などによって実行に移され、成功を収め、1977年にはわずか15羽だった巣立ちひな数は、2006年には200羽を超えるまで回復した(繁殖つがい数は、1979年産卵期に50組だったが、2006年期には325組になった)。

また、アホウドリの第2繁殖地のある尖閣諸島南小島で、1980年代からこの鳥の繁殖状況を調査し、個体数が増加していることや営巣分布域が隣の北小島に拡大したことを明らかにした。

なお、アホウドリの保護研究に従事して30周年にあたる昨年は、鳥島の燕崎にある従来営巣地の保全管理工事の成功と、北西斜面の新営巣地の確立、という二つの山を乗り越えてしめくくった。さらに、小笠原諸島鴛島列島にこの種の第3番目の営巣地を形成する計画のために、予備調査を行なって、その候補地を評価した。

長谷川氏は次のように述べている。『絶滅のおそれのある種を保護し、復活に導くため

には、その種をどうにかして再生させたいという熱意を、長年にわたって(ときには個人が一生かかるほど)維持しなければならない。これは地味で根気のいる仕事であるが、その種が回復して行く姿を目の当たりにすることができ、他にはかえることができない大きな喜びをもたらす。

もちろん、アホウドリの回復はぼく個人の力によるのではない。アホウドリの保護研究を支援し、協力し、激励して下さった数多くの方々や機関・団体だけでなく、実際の保護活動に関わって下さった数えきれないくらいたくさんの方々に、心から感謝を申し上げたい。また、30年間にわたって、ともに奮闘してきたアホウドリたちにも感謝したい。』

【学会・社会活動】

- ・日本生態学会 将来計画委員(1980～82)、関東地区委員(1987～89)
- ・日本鳥学会 評議員(1979～1995)、幹事(1983～88)
- ・環境省自然保護局野生生物課 野生生物の選定・評価検討会 RDB分科会委員
- ・環境省野生生物保護対策検討会 アホウドリ保護増殖分科会委員(1993～)
同上 ウミガラス保護増殖分科会委員(2003～)
- ・文化庁文化財保護部記念物課 天然記念物検討委員(2000～02)など。

【受賞・表彰】

- ・平成7年都民文化栄誉章(東京都、1996年2月)
- ・第18回田村賞(財・国立公園協会、1997年6月)
- ・第32回吉川英治文化賞(財・吉川英治国民文化振興会、1998年4月)
- ・第9回しずおか大賞(文化・教養部門)(株・静岡朝日テレビ、1998年12月)
- ・National Conservation Achievement Award 1998 (International category)
(National Wildlife Federation、USA、1999年3月)
- ・環境庁長官感謝状(日本国政府、1999年5月)
- ・第9回生活文化大賞・生活文化賞(個人賞)(財・日本ファッション協会、2000年3月)
- ・第7回エジンバラ公賞(日本学士院、2000年6月)
- ・The Special Achievement Award (The Pacific Seabird Group、USA、2001年2月)
- ・第5回沼田眞賞(財・日本自然保護協会、2005年12月)
- ・第43回産経児童出版文化賞(理想教育財団科学賞)(『風にのれ! アホウドリ』
フレーベル館発行、に対して。産経新聞社、1996年6月)
- ・第45回小学館児童出版文化賞(上掲書に対して。小学館、1996年11月)

長谷川博氏へ山階芳麿賞の贈賞理由

山階芳麿賞選考委員長 山岸 哲

長谷川博氏は、これまで一貫して、絶滅に瀕したアホウドリの保護研究に努力してこられました。氏は、アホウドリの最大の繁殖地である伊豆鳥島に、1976 年以來 30 年に渉り、毎年数回渡航され、足環による個体識別をもとにしてアホウドリの生態研究を行ってこられました。そして、当時詳細が不明であったアホウドリの繁殖生態を明らかにし、保護に必須な情報である個体群生態学的なパラメータを算出されました。その結果、従来からの繁殖地である燕崎の繁殖成功率が低いことに着目した長谷川氏は、卵期・育雛期の死亡を減少させるために燕崎の営巣環境の改善が必要だと判断し、ハチジョウススキの植栽と砂防工事を提唱、環境庁（当時）や東京都を説得して実施し、繁殖成功率を引き上げ、アホウドリ個体数回復の成果を上げられました。

さらに長谷川氏はアホウドリ個体数の一層の回復のために、デコイ（実物大の模型）と音声による、同種の行動学的特性を利用した誘引を提唱され、よりよい営巣環境と考えられた島内の初寝崎斜面へ新コロニーを形成させるいわゆる「デコイ作戦」を、山階鳥類研究所とともに実施し、成功を収められました。

1970 年代に 150～200 羽であったアホウドリの推定総個体数が、現在 2000 羽を越えるまでになったのは、長谷川氏の努力によるところが大きいことは言を俟ちません。

長谷川氏はまた、アホウドリその他鳥類の生態や保護に関して一般向けの書籍を多数執筆され、鳥類の生態研究について普及啓蒙するとともに、鳥類保護の重要性を訴えられました。

このように、長谷川博氏の研究は、生態・行動研究による科学的知見にもとづいた鳥類の保護研究の大きな成功例であり、氏の社会に対する教育・啓蒙の功績もまた目覚ましいものと考えられます。そこで、山階芳麿賞選考委員会は、鳥類の学術研究と保護の功績を重視して選考する山階芳麿賞に誠にふさわしいものと判断し、第 14 回山階芳麿賞を長谷川博氏に贈賞することにいたしました。

お知らせ :

平成 18 年度 (第 14 回) 山階芳麿賞贈賞式について

平成 18 年度 (第 14 回) 山階芳麿賞の贈賞式と受賞者の記念講演を下記日程で開催する予定です。詳細が決定しましたら、改めてお知らせいたします。

【名称】 平成 18 年度山階芳麿賞贈賞式・受賞記念講演とシンポジウム

【日時】 平成 18 (2006) 年 9 月 23 日 (土・祝)

【場所】 有楽町朝日ホール

【内容】

- ・贈賞式
- ・受賞記念講演 (長谷川博氏) (タイトル未定)
- ・アホウドリの保全と回復に関するシンポジウム (タイトル未定)